



Title	アイヌ語十勝方言における証拠性と叙述類型
Author(s)	高橋, 靖以
Citation	北方言語研究, 3, 129-136
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52605
Type	bulletin (article)
File Information	09_TAKAHASHI.pdf



[Instructions for use](#)

アイヌ語十勝方言における証拠性と叙述類型

高橋 靖以

(北海学園大学非常勤講師)

1. はじめに

本稿では、アイヌ語十勝方言¹の証拠性 (evidentiality) に関する表現を叙述類型の観点から検討する。そして、場面レベル叙述 (stage-level predication) と個体レベル叙述 (individual-level predication) の区別が、証拠性を表す一部の形式の選択に関っていることを明らかにする。

2. 定義：証拠性と叙述類型

証拠性は情報のソースを示す言語カテゴリーと定義される (Chafe and Nichols 1986, Aikhenvald 2004)。類型論的観点から、証拠性には視覚 (visual)、視覚以外の感覚 (non-visual sensory)、推論 (inference)、仮定 (assumption)、伝聞 (hearsay)、引用 (quotative) というパラメータが設定されている (Aikhenvald 2004:63-64)。

次に、叙述の類型に関する概念について取り上げる。場面レベル叙述は一時的な状態を叙述するものであり、個体レベル叙述は恒常的な性質を叙述するものと定義される (Carlson 1980, Kratzer 1995)。場面レベル叙述は事象叙述の一部に対応し、個体レベル叙述は属性叙述に対応する (影山 2009: 4)。

3. 証拠性表現の概観

アイヌ語における証拠性の表現には名詞化辞 (nominalizer) が用いられる (金田一 1931、金田一・知里 1936、浅井 1969、Refsing 1986、田村 1988、中川 1995、切替 1998、Okuda 2006、佐藤 2008)。十勝方言の証拠性を表す名詞化辞は、sir (視覚による認識)、hum (視覚以外の感覚による認識)、haw (発声による認識)、ru (何らかの証拠に基づく確定的な認識) の4種類である。

これらの名詞化辞は、以下の例のように、従属節 (補文) を形成する。

- (1) kim ta ku-oman akus yuk payekay sir ku-nukar.
山に 1SG.SUBJ-行く ところ 鹿 歩き回る NOM 1SG.SUBJ-見る
「山に行ったところ、鹿が歩き回る様子を私は見た」
- (2) ukuran ku-cinita hum wen na.
昨晚 1SG.SUBJ-夢を見る NOM 悪い よ
「昨晚私が夢で見たことは良くなかった」

* 本稿は日本言語学会第 145 回大会 (2012 年 11 月) における口頭発表に基づくものである。その際に貴重なご意見を頂いた方々、及び本誌の二名の査読者に深く感謝申し上げます。

¹ 本稿で用いるアイヌ語十勝方言のデータは、北海道中川郡本別町に在住された沢井トメノ氏 (1906-2006) から調査によってえられたものである。同氏のご教示に深く感謝申し上げます。

(3) kunnerekkamuy haweas haw ku-nu.

フクロウ 鳴く NOM 1SG.SUBJ-聞く
「フクロウが鳴く声を私は聞いた」

(4) numan upas eikostek ruy tek nitek kaske o ru pase.

昨日 雪 あまりに 降る て 木の枝 上 乗る NOM 重い
「昨日はあまりに雪が降って、木の枝の上に重い雪が積っている」

また、名詞化辞による従属節と、主節に相当するコピュラ (ne) が組み合わされた構文が存在する。このタイプの名詞化構文については、名詞化辞+コピュラを機能語化した形式とする分析が示されている (金田一 1931、金田一・知里 1936、浅井 1969、Refsing 1986、田村 1988、中川 1995、切替 1998)。

(5) sita an wa woruncikap nospa wa kus woruncikap kira sin² ne nankor.

犬 いる て 鴨 追う て ので 鴨 逃げる NOM である だろう
「犬がいて鴨を追いかけたので、鴨が逃げるのだろう」

(6) upiskan wa uekarpa ekattar irarapa tek taan sapo iruska haw ne.

あちこち から 集まる 子供たち いたずらする て この 姉 怒る NOM である
「あちこちから集まった子供たちがいたずらをして、このお姉さんが怒ったのだ」

(7) nekon pon pet ne yakkay susu poronno tuk ru ne.

どのように 小さい 川 である ても 柳 たくさん 生える NOM である
「どのような小さい川であっても、柳はたくさん生えるのだ」

(8) sonno nepkon kamuy i-osi ikuyra kan ran hum ne awan.

本当に ように 熊 INDEF.OBJ-後から 忍び寄る て 下る NOM である のだった
「本当に、熊が私の背後から忍び寄ってくる音であったのだ」

さらに、名詞化辞による従属節と、主節に相当する存在動詞 (単数形 an, 複数形 okay) が組み合わされた構文も存在する。このタイプの名詞化構文は、従属節で示される事象が存在することを表す³。なお、この構文についても、名詞化辞+存在動詞を機能語化した形式とする分析が示されている (金田一 1931、金田一・知里 1936、浅井 1969、Refsing 1986、田村 1988、中川 1995、切替 1998)。

(9) atuy otakpa sir an.

海 荒れる NOM ある
「海が波立って荒れている」

² sin は sir の異形態。

³ 北海道南西部の諸方言において、名詞化辞+存在動詞という構文は、疑問文や感嘆文において用いられ、平叙文に用いられることは一般的ではない (Refsing 1986、田村 1988、中川 1995)。このような方言的差異が生じる原因については、さらに検討が必要である。

- (10) taan ohaw onupuy hum an.
この おつゆ 塩辛い NOM ある
「このおつゆは塩辛い」
- (11) toon ekaci ranmano paraparak aw⁴ an.
あの 子供 いつも 泣く NOM ある
「あの子はいつも泣く」
- (12) e-epausi ru an pe ama wa ahun ani.⁵
2SG.SUBJ-頭に被る NOM ある もの 置く て 入る なさい
「あなたが頭に被っているものを置いて入りなさい」

なお、このタイプの名詞化構文は、疑問文においても用いられる。ただし、一部の yes/no 疑問文においては、主節に相当する存在動詞が出現しない（例文 16, 17）。この現象は脱従属節化（insubordination: Evans 2007）とみることができる。

- (13) nep tap eci-ki sir okay ya?
何 こそ 2PL.SUBJ-する NOM ある か
「あなたたちは何をしているのか」
- (14) nen tap apusta kik hum an a?
誰 こそ 戸 叩く NOM ある か
「誰が戸を叩くのか」
- (15) oupeka ekaci e-cakoko a ru etap an?
まっすぐに 子供 2SG.SUBJ-教える た NOM こそ ある
「あなたは正しく子供に教えたのか」
- (16) e-wakkaku aw he?
2SG.SUBJ-水を飲む NOM か
「あなたは水を飲む（と言う）のか」
- (17) e-cikir-i arka ru he?
2SG.SUBJ-足-POSS 痛い NOM か
「あなたは足が痛いのか」

4. 証拠性と叙述類型

証拠性を表す名詞化辞には、叙述類型との関連がみられるものがある。以下の例のように、視覚による認識を表す sir は、目撃の時点において未完結（imperfective）の事象や場面レベルの叙述に用いられる⁶。

⁴ aw は haw の異形態。

⁵ 中川（1995: 12-13）は、アイヌ語千歳方言の名詞化辞＋存在動詞を文末詞と記述している。しかしながら、この例文のように、十勝方言においては関係節内に名詞化辞＋存在動詞が現れるケースがみられる。注3で述べた方言差も含め、名詞化辞＋存在動詞の統語論的位置付けに関してはなお検討が必要といえる。

⁶ 佐藤（2008: 134）は千歳方言の siri（sir の所属形）について、進行中の事象に用いられることを指摘している。

- (18) e-meun ru he? e-uyuyke sir an.
 2SG.SUBJ-寒い NOM か 2SG.SUBJ-ふるえる NOM ある
 「あなたは寒いのか。ふるえている」
- (19) ayapo etap wakka poronno ohetke sir an. cikari.
 おやおやこそ水たくさんこぼれ落ちる NOM ある 惜しい
 「おやおや、水がたくさんこぼれ落ちている。勿体ない」
- (20) ekattar pet ot ta sinotpa wa kewtum-u pirka sir okay.
 子供たち 川 ところで遊ぶ て心-POSS よい NOM ある
 「子供たちは川で遊んで元気が良い（「元気が良くなりつつある」のような解釈も可能）」
- (21) ape maw-e yupke sir an.
 火 風-POSS 激しい NOM ある
 「炎が激しい（「激しくなりつつある」のような解釈も可能）」
- (22) ciwca poro hike nekon an kus tap woruncikap sinep keraypo an
 氷の割れ目 大きい のに どう ある ので こそ 鴨 一羽 のみ いる
 sir an a?
 NOM ある か
 「(川の) 氷の割れ目が大きいのに、どうして鴨が一羽だけいるのか」
- (23) onon arki sisam tap okay sir an⁷ a?
 どこから 来る 和人 こそ いる NOM ある か
 「どこから来た和人がいるのか」

一方、視覚情報と考えられるケースであっても、個体レベルの叙述の場合は、情報のタイプに関し無標である *ru* が用いられる。このようなケースにおいて、*sir* が用いられた例はみられない。

- (24) ayapo etap taan imo siwnin ru an. a-e cik
 おやおやこそこのジャガイモ 緑色である NOM ある INDEF.TR.SUBJ-食べる と
 siwnin nankor.
 苦い だろう
 「おやおや、このジャガイモは緑色だ。食べると苦いだろう」
- (25) e-rekuc-i tanne ru an.
 2SG.SUBJ-首-POSS 長い NOM ある
 「あなたの首は長い」
- (26) taan tunpu sep wa poro ru an.
 この 部屋 広いて 大きい NOM ある
 「この部屋は広くて大きい」

⁷ 名詞化を受ける補文の述語が存在動詞の複数形 (okay) である場合、主節の存在動詞は単数形 (an) となる (例文 30 も参照)。この現象については、さらに詳細な分析が必要である。

- (27) toon nupuri onne ru an.
 あの山 大きい NOM ある
 「あの山は大きい」

なお、視覚以外の感覚による認識を表す hum は、場面レベルの叙述、個体レベルの叙述の両方に用いられる。

- (28) ku-se a p ku-ama a kus ku-kosne hum an.
 1SG.SUBJ-背負う た もの 1SG.SUBJ-置く た ので 1SG.SUBJ-軽い NOM ある
 「私は背負っていたものを置いたので身体が軽い」
- (29) taan imi ponno ironne wa pase hum an.
 この 着物 少し 厚いて 重い NOM ある
 「この着物は少し厚くて重い」

発声による認識を表す haw も、場面レベルの叙述、個体レベルの叙述の両方に用いられる。

- (30) nen tap arki wa okay aw an a?
 誰 こそ 来る ている NOM ある か
 「誰が来ているのか (声を聞いて)」
- (31) taan cikap haw-e pirka aw an.
 この 鳥 声-POSS 良い NOM ある
 「この鳥は声が良い」

証拠に基づく確定的な認識を表す ru も、場面レベルの叙述、個体レベルの叙述の両方に用いられる。

- (32) nen kor cip tap kus ta an ru an a?
 誰 持つ 舟 こそ 対岸 に ある NOM ある か
 「誰の舟が対岸にあるのか」
- (33) e-mi p opitta kosne ru an.
 2SG.SUBJ-着る もの 全て 軽い NOM ある
 「あなたの着物は全て軽い」

5. 証拠性と叙述類型に関する考察

アイヌ語十勝方言では、視覚に基づく直接証拠の表現において、叙述のタイプに応じ異なる形式が選択されているものとみることができる。すなわち、十勝方言において、視覚による認識を表す sir は「未完結の事象や一時的状態」に限定されて用いられる。これは従来のアイヌ語諸方言に関する研究において知られていなかったタイプであり、アイヌ語の

証拠性を表す形式についてさらに記述的な分析が必要であることを示すものといえる。

また、この現象は、視覚性を表す名詞化辞 *sir* が個体レベルの叙述を許容しないという制約に基づくものと考えられる。一方、証拠性を表す他の名詞化辞は、場面レベルの叙述、個体レベルの叙述の両方に用いられる。このことから、これらの形式は *sir* のような制約をもたないものといえる。

これに関連して、知覚動詞の補文に同様の制約をもつ言語がみられることが注意される。例えば、英語では知覚動詞 *see* の補文に個体レベル述語が許容されない (Milsark 1979, Carlson 1980, Felser 1998)。以下の例は Felser (1998: 358) による。

(34) *We saw her be tall.

この制約は、アイヌ語の上記の制約と共通するものといえる。すなわち、英語などの言語で知覚動詞の制約として現れている現象が、アイヌ語では名詞化辞の制約として現れているものと考えられることができる。

6. 文法化からみた証拠性と叙述類型

アイヌ語の証拠性を表す名詞化辞は、以下のように、名詞からの文法化 (grammaticalization) によって形成されたものであることが明らかにされている (金田一 1931、金田一・知里 1936、浅井 1969、田村 1988)。

sir 「(周囲の) 様子」(名詞) > *sir* 「視覚による認識」(名詞化辞)

hum 「音、身体感覚」(名詞) > *hum* 「視覚以外の感覚による認識」(名詞化辞)

haw 「声」(名詞) > *haw* 「発声による認識」(名詞化辞)

ru 「道、跡」(名詞) > *ru* 「証拠に基づく確定的な認識」(名詞化辞)

一方、十勝方言において、*sir* は「視覚による未完結の事象や一時的状態の認識」を表すと規定することができる。名詞化辞の文法化の観点から、十勝方言のようなタイプをどのように位置付けるかについては、より広範な検討が必要とされる。

また、アイヌ語幌別方言においては、名詞化辞 *siri* (*sir* の所属形) が「逆接」の意味を表す副詞節を形成する機能をもつことが知られている (金田一・知里 1936: 160)。以下の例は知里 (1923: 86) による (表記を一部改変)。

(35) *ci-sautar-i* *sinki* *siri* *suke* *ki* *wa*
1SG.TR.SUBJ-姉たち-POSS 疲れる NOM 食事をつくる する て
un-koipunpa
1SG.OBJ-お膳を出す
「姉様たちは疲れてゐるのに食事拵へをし、私にお膳を出して」

このような名詞化辞の用法も含め、今後、アイヌ語諸方言の関連現象の分析を進めるこ

とで、アイヌ語における名詞化辞の文法化の全体像を把握することが可能になるものと思われる。

7. おわりに

本稿では、アイヌ語十勝方言の証拠性表現を概観し、叙述類型の観点から検討をおこなった。そして、場面レベル叙述と個体レベル叙述の区別が、証拠性を表す一部の形式の選択に関っていることを明らかにした。この現象は、証拠性と叙述類型の関連、名詞化辞に反映される文法的制約などの問題を考察する上で有意義なデータを提供するものといえる。

略号

1: 1人称、2: 2人称、INDEF: 不定人称、NOM: 名詞化辞、OBJ: 目的格、PL: 複数、POSS: 所属形接尾辞、SG: 単数、SUBJ: 主格、TR: 他動詞

参考文献

- Aikhenvald, A. Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- 浅井亨 (1969) 「アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言文法の概略—」 アイヌ文化保存対策協議会 (編) 『アイヌ民族誌』 下: 771-800. 東京: 第一法規.
- Carlson, G. (1980) *Reference to Kinds in English*. New York: Garland.
- Chafe, W. and Nichols, J. (eds.) (1986) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, NJ: Ablex.
- 知里幸恵 (1923) 『アイヌ神謡集』 東京: 郷土研究社.
- Evans, N. (2007) Insubordination and its uses. In: I. Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*. Oxford: Oxford University Press. 366-431.
- Felser, C. (1998) Perception and control. *Journal of Linguistics* 34: 351-386.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」 『言語研究』 136: 1-34.
- 金田一京助 (1931) 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』 第2巻. 東京: 東洋文庫.
- 金田一京助・知里真志保 (1936) 『アイヌ語法概説』 東京: 岩波書店 (『知里真志保著作集』 第4巻, 東京: 平凡社, 1974 所収) .
- 切替英雄 (1998) 「アイヌ語十勝方言による昔話『島を引いて泳ぐオタスの少年の物語』の辞典と文法 (2)」 『北海学園大学学園論集』 98: 315-349.
- Kratzer, A. (1995) Stage-level and individual-level predicates. In: G. Carlson and F. Pelletier (eds.) *The Generic Book*. Chicago: University of Chicago Press. 125-175.
- Milsark, G. L. (1979) *Existential Sentences in English*. New York: Garland.
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』 東京: 草風館.
- Okuda, O. (2006) Evidentiality in Ainu. Paper Distributed at the 3rd Oxford Kobe Linguistics Seminar (2-5 April 2006).
- Riefsing, K. (1986) *The Ainu Language: The Morphology and Syntax of the Shizunai Dialect*. Aarhus: Aarhus University Press.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京: 大学書林.

田村すず子（1988）「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』1: 6-94.
東京: 三省堂.

Evidentiality and the Stage/Individual Distinction in the Tokachi Dialect of Ainu

Yasushige TAKAHASHI
(Hokkai Gakuen University)

In this article, I describe the characteristics of the evidential expressions in the Tokachi dialect of Ainu. I mainly point out the grammatical restriction of visual evidential marker *sir* which has hitherto not been described in any dialect.

(たかはし・やすしげ ytakahash@gmail.com)